カポエィラを出来る喜び、感謝を感じた３日間

月城 好生（Lua Cheia）　Grupo de Capoeira Kadoshi Capú Japão

2014年の9/12～9/14の３日間、 京都にてカポエィラ・ アンゴーラのグループ「Nzinga」によるイベント「Ginga Nzinga」に参加しました。このイベントではブラジルのサルバドールに本部があるNzingaのメストレ達３人（Mestra Janja、Mestre Poloca、Mestra Paulinha）を日本に招待し、東京と京都で講義やワークショップなどが開催されました。私は京都でのワークショップに３日間参加しました。ワークショップの中で印象的だった出来事を書き連ねます。

まずは京都の初日、この日は京都大学とのコラボレーションで講義やカポエィラの実演が行われました。始めに大学内の広場にてオープニング・ホーダ。平日にも関わらずこの時点で関西を中心に多くのカポエリスタが集っており、イベントの期待感が否応にも膨らみとてもワクワクしました。メストレ達もとてもリラックスした表情で旅の疲れを感じさせないエネルギーがあり、ホーダもとてもいい雰囲気で行われました。

次に、初日の大学内での講義。「抵抗と解放の身体――ブラジル伝統芸能『カポエィラ』による対話と実践」というテーマで、他大学から参加した先生を交え、それぞれのカポエィラに関するお話を伺いました。

なかでも京都精華大学のウスビ・サコ先生のお話が印象的で、アフリカ地方の伝統的な格闘技などの映像を交えながら、アフリカにおいてカポエィラがどう捉えられているか？ というお話をされておられ、とても興味深く聞かせて頂きました。

このサコ先生、マリ出身ながら日本語がとても堪能で、日本語の表現がとてもすばらしかったです。中でもアフリカにおいてのカポエィラの受け取られ方は「新しいスポーツ、文化」として捉えられており、アフリカの人たちはカポエィラの中にいわゆる「アフリカ性」の様なものは感じていない、といった趣旨のお話をされていました。カポエィラの中におけるブラジルからアフリカへの郷愁、思いを「片思い」というキーワードで仰っていたのがとても衝撃的でした。

また、質疑応答の時間でも聴衆はもちろん、先生達からもお互いに質問が飛び交い、もっと時間が欲しいなと強く思いました。

二日目以降のワークショップもとても充実していました。中でも子供向けのワークショップでのメストレ・ポロッカのレッスンが強く印象に残りました。メストレがビリンバウにまつわるおとぎ話を子供達に聞かせて、次に子供達がメストレから聞いたお話を周りに発表しました。子供達が一生懸命ビリンバウを手に取って話す姿がとても頼もしく、微笑ましかったです。メストレ達もうれしそうでした。

そして、ワークショップ最終日、鴨川べりで日が暮れるまでカポエィラのホーダ。ゆっくり日が落ちて行く中、鴨川でのカポエィラはとても贅沢ですばらしい時間でした。

私はカポエィラを始めてから随分たち、私自身の立場も学ぶ側から、伝える側に変わりました。ただ先生の教えを聞いていた時と違い、人を教え導く立場と言うのは想像以上に難しく、また責任ある役目なのだといつも感じています。今回のメストレのワークショップを通じて思ったのは、そうした責任、重圧の中にあっても、何よりも自分が楽しむ事を忘れてはならないな、というのを強く思いました。

また、ワークショップ中では、不思議と自分がカポエィラを続けて来た中での色んな思い出が蘇ってきました。自分自身の不甲斐なさに落ち込んだり、自分の実力と帯の差に違和感を感じたり、周りと比べて落胆した事、そうした気持ちに対して一つの答えを導いて、立ち直った事、自分たちのグループで仲間とともにカポエィラを続けている事、そうした一つ一つの思いが溢れてきました。

あらためてカポエィラを出来ることの喜び、感謝を感じる事が出来た３日間でした。